

## 私の逸品

## 我がマリア・カラス

パフォーマンス・アートという言葉がある。音楽演奏、演劇公演などを総称する言葉だが、その中でもオペラは音楽と演劇が融合した総合芸術として人の心を捉え日本でも盛んになってきている。欧米ではオペラ公演の始まりがその年の社交界シーズンの始まりとして、初日のガラ公演にはその都市の有名人が着飾って劇場に来る様が、翌日の新聞に大きく報道され、楽屋雀の格好な話題となる。

私がオペラに興味と関心を持ったのはもう23年前、駐在員としてロンドンに一年間滞在したとき、コヴェントガーデンに通ってオペラというものを知ったのが最初であった。その後ロスアンゼルスに駐在したときには、オペラを常時上演するオペラカンパニーがなかったので、やむをえずLP全曲レコードを買い漁って聞いたものだ。

その中で、マリア・カラスの声を聞いたときの感動/いまさらマリア・カラスと言われる方々も多いと思う。1965年7月5日のロンドンにおける「トスカ」公演を最後にオペラ出演を断ち、1977年9月16日に亡くなってからでも既に



易い、ドニゼッティの「ルチア」狂乱の場のアリアを聴いてみるとベルカント特有の細かいパッセージもさりながら、低音部から高音部へと劇的に盛り上げていく心憎いばかりの芸術性、「カラス

15年が経っている。

ソプラノの中でも声域が特別に広く、しかも流麗なスタイルを持つと同時に、情動を誘う音質を持っているソプラノ・ドラマーティコ・ダジリタという、19世紀のオペラ全盛期のロッシーニやベルリーニ、ドニゼッティ、それに若いヴェルディが、こうした種類の声を持っていた歌姫たちのために盛んに書いていた時代に遡らなければ、見られない声を彼女は持っていた。また、彼女が現れてからこれら19世紀のベルカント・オペラの幾つかが上演され、完璧なまでに彼女は再現したと言われている。有名なオペラ歌手なら必ず唱いレコードになっているので比べ

の前にカラスなく、カラスの後にカラスなし」と言われたことが良く分かる。

10年早く生まれていたら、彼女の最盛期の舞台は無理だったかもしれないが、彼女のオペラを観ることができただろう。

思えばブッチェーニ「トスカ」の有名なアリア「歌に生き恋に生き」のままの人生であった。



梅津寿一

1936年1月1日生れ。千代田火災海上保険㈱能力開発部勤務。

2年前、現職に就いてから読書は近代史、現代史関係から心理学、精神病理、仏教書に。妻から呆れられる多趣味。

## 詭弁

A紙社説にいわく「連合は白紙の状態から大胆な政策構想を描くようにしたらどうか」と。ところが「労働運動に社会主義の理念が不要になったとは思わない。戦後政治の中で革新勢力が保守政権の暴走を食い止めてきた実績は評価できるし、平和尊重の理念はこれからの野党にも担い続けてもらいたい」と続く。連合や野党が大胆な政策構想を描けないのはかつての革新と保守、反自民、もっと指摘すれば何が革新か、何が保守なのかを明確

に規定できずうろろしているところに最大の問題があるのである。だから大胆な政策構想を描けという提言は良いがその後がいけない。それにこだわるから何もできないということを知っているからこそ「大胆に」と呼び掛けたはずではなかったか。

知人に一切社説を読まないという人がいる。本気で書かなきゃ、読む気がしなくなるのは当然だろう。社説の方々にも大胆不敵な展開を期待していますよ。



家元登場